

第 1 回森林・林業振興計画有識者会議

日 時	令和 4 年 8 月 31 日（水） 15 時 30 分から 17 時 28 分
場 所	市役所 2 階第 1 委員会室
委 員 (敬称略)	○出席 10 名 寺岡行雄、大竹野千里、岡本孝志、黒松正大、鳥丸等、下清水久男、栢山博、 神崎弘治、下新原博也、鈴木健太

○主な意見等

発言者	内容
委 員	<p>1 鹿屋市森林・林業振興計画の策定について</p> <p>2 基本施策及び施策に基づく取組（案）について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ビジネスにはいろいろな手段がある。使っていこうとするその発想を持っていくことが大事だと思う。 ・ 植えないという選択肢を与えないための低コストの植栽、保育の技術が必要。従来言われているものの 3～4 割は減らしても大丈夫。植えない選択をさせないことが大事だと思っている。 ・ 良い苗を植えて、育てていけばできることだと思う。 ・ 丸太だけで稼ごうとしても限界がある。いろいろな物やアイデアを使ってお金にしていく。お金にならないと森林所有者も諦めてしまうことが先に立つ。そうならないように、地元にお金が落ちるような仕組みも必要。 ・ 木を伐ることは人間社会を支えることであり、木を有効に利用していくことは素晴らしいことであるという発想を持っていくべきだと思う。 ・ 今日示されている取組案は、森林・林業の業界の皆さん向けの話であり、観光等の話になると、いろいろな業種の方を交えて話していく必要がある。 ・ 人はなかなか増えないが、保育していく面積は増えるので、機械化を図る必要がある。 ・ インターンシップで学生を派遣できる。受け入れたいというお気持ちを受ければ対応できる。 ・ 鹿屋市の就業者数は何人か。国勢調査で把握できる。 ・ 県内の林業就業者（約 1,200 人）のうち、3 分の 1 が大隅半島にいることになる。大隅半島は林業の中心である。 ・ 年間 100、200ha を皆伐して植えていきましょうというやり方は、計算はできるが、実際に手が届くところ（実経営面積）かまで分析する必要がある。 ・ 森林の多面的機能には、目安はあるが、値札は付けられない。現時点で値札がつけられるのは木材。今後、二酸化炭素にもつけられそうである。

発言者	内容
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 竹について、鹿屋市は畜産業が盛んであるが、企業的な畜産業が多いので、地元の物が良いので使ってくださいといっても、なかなか望むようにはならない。規模の大きな農家をつかまえる必要があると思う。 ・ 低コストの植栽で、植栽密度を減らす。1500本/haで良いのではないかとの話があるが、保安林は2,000本/ha。県等のルールを変えてもらう必要がある。 ・ 新しい技術に合わせた作り方をしなければならない。先々を見越したうえで、木の植え方、育て方を変えていかなければならない。はじめから間隔が1.8mだと機械が入れないが、3mだと入ることができる。 ・ 今伐っている木を植えたときには、合板に使われるとは夢にも思っていなかった。今植える木は、50年後にどう使われるのか、結論としてはわからない。 ・ 鹿屋の木で家を建てる、目に見える繋がりを年間数棟でも良いからやってみる。市役所がのぼりを作り、広報を行えばよい。知ってもらうことが重要である。鹿屋の木を使うという象徴的には悪くない。 ・ 木の卵を作り、市内の幼稚園・保育園に配る。木の香りを知っている人は、将来、木で家を建てたい人が増える可能性は高い。 ・ 鹿屋市有林を起爆剤に、誘導のものとして使うことは良いのではないかと思う。 ・ 市が手を届かせていく必要がある山がどれぐらいあるのか捕捉する必要がある。譲与税は今までに業務のプラスアルファに使われる。実行部隊を担う森林組合の通常業務プラスアルファの業務量の把握にもつながる。 ・ 今回のような計画を立てる場合は、当面10年は良いが、保育が終わる30年後まで考えると、機械化などのいろいろなことを想定して作る必要がある。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 問題解決ではなく、どのような森林を作りたいという未来図が必要。未来図、ビジョンから逆算で、たくさんある課題の中から、どこをメインに取り組んでいくのか、ポイントを絞るべきだ。 ・ 私達は「人の手によって管理された生物多様性に富んだ大隅半島の森を次世代へ」を掲げて取組をはじめた。市の計画にも寄り添いたい。 ・ 直径50cmの木が必要になった時、そこまでの作業路がなければ、道を作るための時間がかかる。その木が、いつ必要だというのがわかれば、路網整備も計画的に進めることができる。 ・ 出口の必要量も把握してほしい。 ・ 特用林産物もだが、福祉や教育、スポーツ、レジャーも取り組める。市のビジョンを示す必要がある。そのビジョンにどのように組み込むかを考えていく必要がある。 ・ 白地（手が届いていない山）をどうするか。市としてのビジョンを示していただきたい。行政の主動がなければ動きようがない。 ・ どこにどんな木があるのかを把握しておくことで、材の直径や、樹種がわか

発言者	内容
委員	<p>る。いろいろな材がある方が良い。出口が多様化できる。出口を多様化するためにどうするか。その答えを出させるために、効率的に山の作業をどうするか。出口を行政の方で見定めて、それに向かって効率化を進めていかないと、10年20年で間違った方向に進んでしまう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 市の計画でもビジョンや姿勢を掲げると、取り組んでいくポイントが定まっていけるのではないかと思う。 ・ 山としての経営が成り立っていないといけない。出口戦略をやっていないといけない。 ・ 木が何に使われるか注意していく必要がある。住宅だけではない。 ・ 良い木が出ても、電気にするために燃やされる時代が来ると思うと怖い。近づいているとも思う。 ・ 研究的な部分では、東京の展示会で、木に由来した素材でできた車が公開された。(セルロースナノファイバーの活用) ・ 山を整備すれば、観光にもなる、木育もできるし、生産性も上げることができる。 ・ 生産性はあるし、それを楽しむ人が出てきている。移住がはかられていく可能性も大いにあると思う。 ・ 担い手の面についても、他の業種と同様に、機械化、ロボット化をどこよりも早く追求していく必要があり、その支援等を行うべきだと思う。 ・ 20年以上前、青年会議所で、森林管理署に協力をもらい、高隈に4haの昔の里山で200年や300年のイダジイ(ブナ科の常緑高木)があったので、「ふるさとの森」として作ったところ、鹿屋市の小中学校の授業や遠足で、かなり使われた。水も沸いてよいところだった。森林管理署の職員が子供たちに説明をしてくれた。駐車場までできた。放っておいたら使われなくなった。 ・ 鹿屋市にも、このようなもので、きちっとしたものが一つあれば、木育として、幼いころから経験できる。 ・ 出先を考えながら山の整備をしていく必要がある。補助金だけでいつまでもやっていくわけにはいかない。 ・ 山はスギ・ヒノキだけではなく、山の形状や土地に合ったものを植栽する。 ・ 山の生産をつくれれば、人が住んで生活していける。限界集落も少しずつ緩和されていく。 ・ 短期、中期、長期のかたちで考えていかないといけないと思う。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ どこにどういう年齢の山があって、筆界がはっきりしているという台帳が必要。どこにどれだけの広さの山があり、どれだけの材積があるという情報がなければ計画づくりは難しいと思う。 ・ 市の住宅着工数は横ばいであるが、実情は市外業者が多く入り込んできてい

発言者	内容
委員	<p>るので地元工務店の取扱いは非常に落ちている。比例して、地域産材の取扱量も落ちている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 社員の採用で実感することは、木が好きな人は、小さいころに木と戯れている。小さいころの教育、木育の大切さを感じている。 ・ スギ・ヒノキだけではなく、副産物の収入で経営が成り立つという方向性も大切である。 ・ 鹿屋市が管理する山がどれくらいあるのか。森林組合が管理する森林がどれくらいあるのか。また、管理されてない森林がどの程度あり、これをどう計画にあてはめていくのか。 ・ 手を付ける山がどれほどあり、その山のどの樹種から優先して取り組むか。スギやヒノキの整備を優先するのか。そして、その山でサカキ等の枝物を栽培するのか。 ・ まず、市は具体的な方向を示す必要がある。現時点では意見の出しようがない。ここでいくら検討しても何から手を付ければよいのかわからない。 ・ 若者が地元に残れる糧が必要。 ・ 鹿屋市の森林の中で今後見込みがあるところにモデル地区をつくってはどうか。事業内容には委員それぞれの異なる分野の意見を取り入れてはどうか。 ・ 錦江町は進んでいる。一回見に行っても損は無い。 ・ 夢が持てるビジョンをつくってほしい。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ グリーン成長、カーボンニュートラル、いろんな形がでてくる。整理していく必要がある。 ・ 今までは、川上・中・下でそれぞれが動いてきたが、これからはサプライチェーンを確立しないと、最終的な答えは出てこない。計画にも盛り込んでほしい。 ・ 組合の将来を担う職員を雇用したい思いがある。人材が欲しいので、学生を将来導く道をつくりたい。 ・ 担い手の確保も計画の取組案に明記されているので、今後の道ができていくと思う。 ・ 鹿屋市として、利用可能な森林の面積をおさえるべきだ。組合の台帳等もあるので、情報が整理できることからしていけばよい。 ・ 森林・林業は整備・保全されていくべきである。そうでなければ人が生きていく場がなくなることにつながる。この点を周知していく必要がある。 ・ 組合として、木育で、笠野原小学校の学林地でイベントを行った。 ・ 計画の中に盛り込んでもらえれば、いろいろな面で生きてくると思う。教育委員会とも連携しながら。 ・ スギやヒノキは植えてから 30 年ほど収入が無いので、収入の繋ぎになるも

発言者	内容
	<p>のを考えていくことも大事だと思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 植えるときには、伐るときにどういう時代が来るのか予測することは難しい。計算は難しい。 ・ どのような材が求められているのか、どこに使いたいのかという声を聞きながら、進めていくことが大事だと思う。 ・ 組合として何をすべきか、今、山に求められるものは何かを考えたときに、資料に示されている全ての項目が総合的な観点では該当してくる。全てが活きる、大切なことである。 ・ 掲げた課題をどのようにして整備するのか、鹿屋市に当てはめていくのが大事。 ・ 森林環境譲与税を有効に使っていかなければならない。今後も知恵を出しあっていきたい。このことを行政と整理していきたいと考えている。行政と連携して、森林経営管理制度を活かしたい。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 林業に興味を持ってもらう施策が必要。 ・ 林業について子供たちが知らないことは問題。周知・体験してもらう必要を感じる。 ・ 職場体験で、子供たちを受け入れる。伐採現場を見て興奮して帰っていく。建設現場のような機械化が進んでいる。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 市内で使える山がどれだけあるのか。それを何年間で使っていくのか。いろいろな事業が成り立っていくには、どれぐらいの量が必要なのか。出してはどうか。そうすれば、地元に出す量や残った材をどうするか、整理しやすくなる。 ・ 今使われていない竹をうまく使っていけば、目玉になるのではないか。牛の飼料や土壌改良に使う事例がある。 ・ 特用林産は下がってきている。そのような中で、主としてやるのか、半農でやるのか、林業や農業と合わせて検討していく方法がある。
委員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「持続可能」が今後のキーワードになる。「持続可能」という視点から計画を作っていただきたい。 ・ 経営管理制度は、開始から3年間が経過した。その結果は示すことができる。
議長	<ul style="list-style-type: none"> ・ コスト削減をしていく過程で、どうやって効率化させていくのか、まさに作業環境の改善も同時進行で進めていかなければならない。 ・ 森林経営管理制度で、意向調査をしているので、その結果等もお示ししたい。